



教皇様の聲

6

254号

Libreria Editrice Vaticana, Citta
del Vaticanoの転載許可済 2001

聖ヨセフ

〔正午のお告げの祈りの前に行われた教皇様のお話。〕

1 (….) 聖ヨセフは信仰の模範です。アブラハムのように、ヨセフはいつも自らを神の摂理に完全にゆだねて生きていました。このように励みとなる模範を示し、特に神のご計画がはっきりとはわからないまま、その「みことば」を受け入れるよう求められるとき、私たちを力づけてくれます。

また聖ヨセフをまねて、謙遜に従順を實行するよう招かれています。ヨセフの従順は、黙々と隠れて懸命に働く生活の中で輝いています。ナザレの「学校」は現代人にとって大変貴重な存在です。現代は、外見や成功、自主性や間違っただ個人の自由をたたえる傾向があります。そのような傾向に反して、素直さや従順、敬意と愛の心で神のみ旨を求めることの重要性を再発見することはとても大切なことです。

2 聖ヨセフは妻と神の御子に仕える生活を送りました。また、神を信じる者にとって「治める」ということは「仕える」ことであると教え、私たちの雄弁な模範となったのです。また、生活の知恵を示してくれる方でもあり、家庭や学校、教会での父・指導者の役目を果たす人にとっては特にそうです。父親である皆さんや、(….) 教会で霊的な父親としての役割を果たすよう神に任命された皆さんのことを特に思い出しています。(….)

キリスト者が信頼を込めて呼びかける聖ヨセフが、神の家族の歩みをいつも導いてくださいますように。特に、霊的物的に父親の役割を担う者たちを助けてくださいますように。そして、ヨセフの妻であり救い主の母おとめマリアが、私たちの祈りに付き添い、取りなしてくださるようお祈りしましょう。

(2001.3.18)

全世界に福音を伝える

〔教皇様は、回勅「救い主の使命」発行10周年を記念するシンポジウムに参加した人々にお話しになった。〕

1 回勅「救い主の使命」出版10周年を記念したこの興味深いシンポジウムで皆さんをお迎えできることを喜んでいきます。(….)

新しい千年期の初めに行われているこのシンポジウムの意図は、教会共同体の生命における、福音宣教の重要性に光を投げ掛けることです。実に「諸国の民」への宣教というのは、キリストが弟子たちに最初に託した仕事です。このことに関して、神である主のみことばは特別に雄弁に鳴り響きます。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だからあなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。… わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(マタイ28・18~20)そして、いつも主の命令に心を留めている教会は、その構成員の世話をやめることはありません。また、離れて行った人々に再び福音を教え、まだ福音を知らない人々に宣べ伝え続けるのです。この問題について、

今日記念している回勅「救い主の使命」の中でこう書き記しました。「『諸国の民に』宣教することなしには、教会そのものの宣教する側面は、本来の意味とそれを表す活動そのものを奪われてしまうでしょう。」(34)

これまでになく必要な宣教活動

私は教皇になって以来ずっとこのことを心に留め、あらゆる人がキリストに扉を開くよう招いてきました。このような宣教活動へ関心を抱くことで、多くの使徒職旅行を行うよう駆り立てられました。それは宣教に向かって開かれた活動というこれまでにない大きなしるしを教皇庁の全活動に与え、また洗礼を受けたすべての人の仕事について絶えず教理的に深く考えることを育むためです。(….) 回勅「救い主の使命」は、このような背景をもとに生まれた

ものです。

2 10年前に「救い主の使命」を公布したのは、第2バチカン公会議の宣教活動に関する教令が認可されて25年を記念する年でした。ですから、回勅「救い主の使命」は公会議を記念したものと考えてもいいかもしれません。公会議の目的は、教会のメッセージをもっと分かり易くし、現代にキリストの救いを広めるためより効果的に教会の司牧活動を行うということでした。

しかしながら、回勅「救い主の使命」は公会議の考えを思い出すための単なる記念品ではありません。むしろ私の最初の3つの回勅のテーマである偉大な三位の神に戻ることによって、教会が常に感じるべき宣教の使命が急がれることを強調し、現代人の間で宣教活動を行うための新しい方法を指し示すつもりでした。

ここで、このような動機について再度確認したいと思います。というのも、まだ福音を知らない人々の間で行われる宣教活動が今も必要とされており、特にいくつかの区域や特定の文化背景をもつ場所が必要だからです。また、さらに世界を眺めてみると、「諸国の民」への宣教は、キリスト教国を含むあらゆる所で必要になっているのがわかります。キリスト教の確立している地域でも非キリスト教徒の移民数が急速に増えているのがその理由です。

宣教活動の中心は、キリストとその愛の知識と体験を宣言するという事です。教会はイエスの明確な要求を避けて通るわけにはいきません。人々から救いの「福音」を奪うことになるからです。また宣言とは、対話や人間性の向上などの活動に見られる自立性を弱める行為ではありません。むしろ、思いやりに基づいた対話や人間性の向上をはかるものであり、聖霊の息吹を注意深く識別しながら、絶えず人々への尊重を証しさせるものです。

3 教会に対する信心深い熱意を摂理的に高めた大聖年は終わったばかりです。使徒書簡「新千年期の初めに」で、あらゆる世代、文化の信者に示したことは、沖に乗り出し、改めてキリストから始めるということです。「諸国の民へ」宣教する司牧活動にとって、キリストから始めるということは、新しい活力と刷新を示しています。あらゆる人や国には救いという喜びのメッセージを知る資格があるのですから、私たちの第一の義務は、宣教と証言によって人々のためにキリストへの扉を開くことです。時には様々な理由で、福音宣教やキリストへの忠誠を公けにあらわすことが妨げられるとしても、キリスト者には、祈り、対話、人間的な奉仕を通して救いの業に協力する可能性が残されています。

三位一体の愛に根づく教会は、生まれながらに宣教師です。しかし、教会はその全活動において真に

宣教的でなければなりません。聖霊が全信者の心にまく愛を教会が完全に生きるならそれが実現するでしょう。「何かをするかしないか、何かを変えるか変えないか、ということの理由は、愛そのものでなければなりません。愛はすべての行動の理由であり、その目標であるべきです。」（同上60）

主への忠誠は宣教活動の基礎

4 兄弟姉妹の皆さん、回勅「救い主の使命」で、諸国の民に対する広大な使命へと教会を結集させる試みから10年がたちました。新しい世紀と千年期の始まりである今、この招きを繰り返します。どこに住みどこで働いていても、あらゆる教会、共同体、組織やキリスト者の集まる場所で、この広大な活動に対して協同責任を自覚することができますように。実際、司祭、修道者、信徒といった教会生活のどんな身分にとっても、協力のための新しい機会が今は用意されています。キリストに忠誠を尽くす者が、キリスト教でない人々と接触する状況は増えつつあります。国際的なレベルで人権擁護のために働くことができる機会もあります。また、共通善の促進、救いのメッセージを伝えるためのより良い状況を育てるために働くこともできるようになっています。（同上82参照）

しかしながら忘れてならないことは、主に対する福音宣教者の忠誠が宣教活動の基礎になるということです。宣教者の生活が聖化されればされるほど、その宣教はもっと効果的になります。宣教への呼びかけは、聖性への絶え間ない呼びかけです。回勅「救い主の使命」でこのことについて記したことを思い出すにはいられません。当時書いたことをもう一度繰り返します。「聖性への普遍的な招きは、宣教への普遍的な招きと密接につながっています。すべての信者は、聖性と宣教に召されています。」（同上90）こうしてのみ、教会に反射するキリストの光が現代人を照らし得るのです。

教会の一致と普遍的な使命を保証し促進するように求められているペトロの後継者にとって、これは第一の仕事です。また聖座および崇高な役務を教皇と共に負う司教の義務です。そして年齢や状況にかかわらず、どんなキリスト者もこの責任を免除されることはありません。

兄弟姉妹の皆さん、この責任に気付いてください。そして聖霊の絶え間ない呼びかけに寛大に応えましょう。新たな福音宣教の星であるマリアが私たちのために取りなして下さいますように。聖なる保護者である幼きイエスの聖テレジアやフランシスコ・ザビエルがその模範と保護によって助けて下さいますように。

このような願いとともに、皆さんと皆さんが日々行っている教会の奉仕に対して祝福を送ります。

(2001.1.20)

詩編の祈り

〔一般謁見でのお話。詩編についての第2回目の要理講話。〕

1 詩編と賛歌についての解説を始める前に、前回の要理講話で触れた序論部分を完結させたいと思います。霊的伝承の愛すべき側面の動きをつかみ、考察して行きましょう。詩編を歌うと、キリスト者は聖書に現存する聖霊、そして洗礼の恵みによって自分の中に住まわれる聖霊との一致のようなものを体験します。自分の言葉で祈る時より詩編の言葉で祈るほうが、聖パウロの言う「言葉に表せないうめき」（ローマ8・26）を自分の中で反響させることとなります。「言葉に表せないうめき」で、主の聖霊は信じる者をイエスの祈り「アッパ、父よ」と一致させるのです。

古代の修道士たちはこれを確信していましたから、母国語で詩編を歌うことを恐れません。自分たちが何らかの形で聖霊の「器官」であることを知るだけで十分でした。自分たちの信仰によって、聖霊の並外れた「エネルギー」が詩編の章句から飛び出すことを確信していたのです。同じ確信は、詩編の祈りを「射祷として」使う時も同じでした。「射祷」とはラテン語の「イアクルム」（投げ矢）から来たものです。詩編の短い数節を使う射祷は真っ赤に燃えた矢先のように、誘惑に対して投げつけられます。4～5世紀の人であるヨハネ・カシアノは、ある修道士が詩編69の最初の数節の大変な効力を発見したことについて述べています。「神よ、わたしを救ってください。急いで助けに来てください。」この言葉はその頃から時課の祈り（教会の祈り）の導入部ようになっていたのです。（Collationes, 10,10:CPL512, 298ss参照）

2 聖霊の現存と共にもう一つの大切な側面は司祭的行為の現存ですが、それは配偶者である教会とご自分を結びつけるキリストの祈りの中で発展させられたものです。このような関係をもとに、第2バチカン公会議は時課の祈りにはっきりと触れ、次のように教えています。「新しい、永遠の契約の最高司祭、キリスト・イエズスは、人間性をとり、天上で永遠に歌われている賛歌を、この追放の地にもたらした。（…）実に、キリストは、司牧職を自分の教会を通して継続している。この教会は、聖体祭儀だけでなく、他の方法、特に聖務日課（時課の祈り）を果たすことによって、主を絶え間なく賛美し、全世界の救いのために代願している。」（「典礼憲章」83）

従って、時課の祈りには公的な祈りという特徴もあり、また教会は特に時課の祈りと結び付いています。時課の祈りは、1日に何度か行われる祈りを教会がまとめたものですが、それがどのように決められ

ていったかもう一度考えるのはすばらしいことです。このことを考えるためには、まず初代キリスト教共同体に立ち戻る必要があります。当時、キリスト者の祈りとモーセの掟に基づく律法の祈りはまだ強く結びついていました。律法の祈りは、エルサレムの神殿で1日の決められた時間に行われていたものです。使徒言行録には、使徒たちが「心をつにして神殿に参」ったこと（2・46）、「午後三時の祈りの時に神殿に上って行った」（3・1）ことが書かれています。さらに、特にすぐれた「律法の祈り」が朝と夕方に行われたことも記されています。

3 一日の特定の時間、また一週間一年の決まった日のために、イエスの弟子たちは詩編の中から特に適した箇所を徐々に選び出して行きました。こうしてキリストの秘義と結びついた詩編の深い意味を理解したのです。聖チプリアノは、この過程の権威ある証人です。3世紀の前半に聖チプリアノは次のように書き記しています。「主のあがないを祝う祈りを一日の初めに朝の祈りの中で行うのは本当に必要なことです。主の復活を一日の初めに祝うことは、かつて聖霊が詩編で示した言葉と一致しています。『わたしの王、わたしの神よ、あなたに向かって祈ります。主よ、朝ごとに、わたしの声を聞いてください。朝ごとに、わたしは御前に訴え出て、あなたを仰ぎ望みます。』（詩編5・3～4）太陽が昇り、一日が始まろうとしている時、もう一度祈る必要があります。キリストは実際に本物の太陽、本物の昼なので、太陽と世の終わりの瞬間に祈り、光が私たちの上に戻るよう願いながら、キリストが永遠の光の恩恵をもたらしてくださるよう祈るのです。」（「主の祈りについて」35:PL39,655）

4 キリスト教の伝統は、ユダヤ教の祈りを永続させるだけではありません。むしろ、ある種の刷新を行った結果、イエスの弟子たちの祈りの全体験にさらなる特徴を加えることとなったのです。こうして、朝と夕方の主の祈りに加えて、キリスト者は日々の祈りを祝うための詩編を自由に取り入れます。詩編を導入する中で、教義上特に大切な時に特定の詩編を使うことが提案されました。その中でも、復活のあがないが祝われる主の日の日曜日を準備する徹夜祭の祈りが重要です。

典型的なキリスト教の特徴が、後に三位の栄唱から加えられました。詩編と賛歌の終わりに「栄光は、父と子と聖霊に」が加えられることになったのです。こうしてすべての詩編と賛歌は神の充満によって照らされています。

5 キリスト教の祈りは最高の信仰の出来事であるキリストの過ぎ越しの秘義を中心に生まれ、育てられ、発展します。こうして朝と夕方、日の出と日没時に、そして復活祭で、キリストの死から命への過ぎ越し、つまり復活が思い出されるのです。そのため、夕べの祈りの灯に現れるキリストを象徴する「世の光」は天窓とも呼ばれました。昼間の時間は順に主の苦しみの話を思い起こさせます。そして第三時課は聖霊降臨を思い出させます。最後に、終末論的特徴のある夜の祈りは、ご自分の帰還を待つ間行うようにとイエスがお勧めになる徹夜の祈りを呼び起こします。（マルコ13・35～37）

それゆえキリスト者は、祈りのリズムを保つことで、「絶えず祈れ」という主のご命令に応えたので

した。（ルカ18・1,21・36,1テトス5・17,エフェソ6・1参照）しかし、生活全体を何らかの形で祈りとすることを忘れていたわけではありません。オリゲネスはこの点に関して次のように述べています。「彼（キリスト）は絶えず祈り、祈りと仕事、仕事と祈りを一つにする。」（On Prayer,XII,2:PG11,452C）

詩編の朗唱という自然な習慣の成り立ちは、以上のようなものです。耳を傾けこのように生きるならば、キリストを信じる者は詩編をかざる三位一体の栄唱によって、聖霊の波に絶えず乗り、神の民全体と一致して、絶えず命と平和の海に突き進むこととなります。洗礼において生命と平和の海に入る、すなわち父と子と聖霊の秘義に浸されるのです。

（2001.4.4）

カルメルのスカプラリオ

〔カルメル山の聖母のスカプラリオ750周年を迎えるにあたり、

教皇様はカルメル会の総会長らにメッセージを送られた。以下はその一部を抜粋したもの。〕

スカプラリオのしるしはマリアの靈性を効果的に統合しています。マリアの靈性と一致することで、信者の信仰心は育てられ、愛すべき聖母の現存を日々の生活の中で敏感に感じ取るようになります。スカプラリオは本来「身に付けるもの」です。スカプラリオを受ける者は、多かれ少なかれカルメル会に近づき、教会の善のために聖母に奉仕するよう自らを捧げることになります。（「スカプラリオ着衣式次第」参照）スカプラリオを身に付けている者は、こうしてカルメルの土地へと導かれ、「味の良い果物を食べ」るのです。（エレミヤ2・7参照）また、イエス・キリストを身に付け、教会と人々の善のためにキリストを示すという日々の責任において、愛するマリアの現存を体験します。（「スカプラリオ着衣式次第」参照）

こうして、スカプラリオのしるしは二つの真理を引き出します。一つは、幸いなおとめの絶え間ない保護が、日々の歩みにおいてだけでなく、永遠の栄光に移る瞬間にも与えられるということです。二つ目は、マリアへの信心とは祈りや様々な機会に敬意を示す賛辞に限られたものではないということです。マリアへの信心とは「習慣」にすること、つまり祈りと内的生活で織りなされたキリスト教的なふ

るまいに絶えず向かうことでもあるのです。それは、頻繁に秘跡を受け、寛大に靈的物的な奉仕を行うことで果たされます。このようにしてスカプラリオは「契約」のしるしとなり、またマリアと信者との交わりのしるしともなります。具体的には、十字架からヨハネを通して御母を与えられた私たちが、そのかわり靈的な母に自らを捧げることで契約が交わされるということが言えるでしょう。

カルメル会の聖人の聖性と知恵は、その模範の一つとして、内的に人々を形成し、長子であるキリストとの一致を助けるマリアの靈性を示しました。カルメル会の聖人たちは、御母のご保護のもとで育てられたのです。

私自身も本当に長い間、胸の上にスカプラリオを身に付けています。絶えずそのご保護を感じている天国の御母への愛から、マリアを記念する今年、カルメル会の皆さんと子としての愛をもってマリアをたたえる敬虔なキリスト者に御母の助けがありますように。そして、マリアの愛において成長し、静かな祈りの方である御母、あわれみ深い希望と恵みの御母の現存を世界に輝かせることができますように。

（2001.3.25）



「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円（税込）

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920

FAX. 0797-34-4920振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

*電話受付時間は月・木・金曜日午前9：30～11：30、水曜日午後2：00～午後5：00 となっています。

教皇様の平和の祈り

中東戦争の象徴となってしまった都市クネイトラでヨハネ・パウロ二世はひざまずき、聖地と世界の平和のために祈りを捧げた。

ダマスクスをたった教皇様は、聖パウロの足跡をたどり陸路でゴラン高原のクネイトラへ向かわれた。クネイトラは1967年の七日間戦争後、イスラエル兵によって破壊され占領された。現在、旅行者が非武装化の任務にあたる国連軍しか目にする事のない場所となっている。

教皇様は、この廃虚の町にある大規模に破壊されたギリシア正教会へと向かった。破壊のため、その内部では数メートルしか前に進むことはできなかった。木の祈禱台にひざまずくと、教皇様は次のように祈られた。「戦争で傷ついたこの場所から、聖地と世界の平和のために心を上げて祈りたいと思います。真の平和は神の恵みです。神の恵みに心を開くには、神と対話し、その掟に良心的に従うことが必要です。」

シリアは今回の教皇訪問をイスラエルとの紛争についての意見表明のために用いてきた。シリアとイスラエルは理論上戦争状態にある。両国は、ゴラン高原についての交渉が決裂した後、1999年1月の平和交渉を中止した。シリア側は、ゴラン高原はレバノンの支配下に置くことが正当であると主張する。

教皇様は、神に向かって祈り、戦争を経験した全ての人の良心に訴えかけられる。「中東に住む方々のために祈ります。敵意と分裂の壁を取り除き、正義と一致の社会を建設することができるようお助けください。」そして、宗教指導者のためには特に次のように祈られた。「寛大に人々の共通善のために働くことができるよう、指導の立場にいる方々をかりたててください。奪うことのできない人間の尊厳と基本的権利を尊重することができますように。サラム！サラム！サラム！」教皇様はアラビア語の「平和」という言葉を繰り返して祈りをしめくられた。

南ガザ地区に対して行われたイスラエル軍による爆撃のために4ヶ月の乳児の命が失われたばかりである。この爆撃は、ガザ地区のユダヤ人居住地域への攻撃に対する報復として行われたものだった。

教皇様は言われる。「紛争の悲しむべきニュースとそのために亡くなった方々のことが耳に入り、私の祈りはさらに強いものとなります。」バチカン・スポークスマンは教皇様が示す懸念を、政治色を負わせるような表面的な試みと取り違えてはならないと述べる。今回の訪問は、巡礼を目的としたものだからである。平和の祈りを捧げた後、教皇様はオ

リーブの木を植えられた。後ほど、クネイトラから数km離れた「友情の庭」へ移されることになっている。以前は5万人が住んでいた廃虚の都市クネイトラを離れる前に、教皇様はオーストリア兵士らで構成される国連軍に感謝を示した。「皆さんの存在は、中東の人々、文化、宗教の一致をもたらすための支援が、国際的に決定されたことを示しています。全能の神が皆さんとその努力をお守りくださいますように。」シリア滞在の三日間、教皇様は中東の平和を繰り返し呼びかけられた。「この聖地で、キリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒が信頼し合って大胆に働くことが求められています。そして、人々の合法的な権利が尊重され、平和に互いに理解しながら生きることができる日のために、直ちにはたらかさける必要があるでしょう。」

（2001.5.7シリア）

巡礼としての シリア訪問

〔教皇のゴラン高原訪問は政治的動機で行われたものではない。バチカン・スポークスマン、ホアキン・ナバロ・バルスが聖地巡礼の要約を語る。〕

バチカン・スポークスマンは聖パウロの足跡をたどる教皇の巡礼の中での主な出来事を伝え、次のように述べた。「教皇様はモスクを訪問し、クネイトラで祈りを捧げました。しかしながら、クネイトラ訪問に政治色を帯びさせようとする動きもあります。」ギリシアとの関係については、帰国後教皇に宛てられたギリシア正教会総主教の手紙を紹介した。「短期間ではありましたが実り多い訪問をされたことを感謝しています。教皇様のおかげで使徒パウロの足跡をたどることができました。私たちの主イエス・キリストが、相互理解を目指す私たちの意志と責任感を強めてくださいますように。」スポークスマンは、この手紙と、教皇と総主教が主の祈りを共に唱えたことが、両教会の一致を示すものだという。

教皇のダマスクスのモスク訪問は、ローマにあるユダヤ教礼拝堂への15年前の教皇の訪問を思い起こさせる、と説明する。しかしながらカトリックとの関係は、イスラム教とユダヤ教とは異なることについても付け加える。

ゴラン高原の廃虚の町クネイトラ訪問についても伝えた。「今回の訪問に政治色を帯びさせようとする試みがありました。どこで言われているとして

も、率直に言ってそのような考えはばかげたものです。教皇は、クネイトラの人々への祈りを捧げるために行かれたのです。幸いにも世界の世論は、事実だけでなく教皇の意向についても、それが宗教的なものであり政治的な行為ではないことを理解しています。」

シリア大統領のイスラエル批判を教皇が非難しなかったという指摘をイスラエルから受けたことに関して、バチカンとイスラエルとの関係が悪化するのではないかという質問を受ける。このことについてスポークスマンは次のように答えた。「悪化することなどありません。イスラエルとシリアとの関係に何かあったとしても、バチカンが巻き込まれる必要はないでしょう。教皇は訪問客として訪れただけですから。しかしながら、あらゆることにあてはまる国際的原則を伝えることで、教皇は意見を表明なさいました。」

(2001.5.10バチカン)

教皇の命を救った 旧ソ連将校

当時神学生だった現教皇カロル・ヴォイティワは、旧ソ連赤軍将校シロテンコ氏がいなければ、ローマ法王になることも、生存していることさえもなかったかもしれない。歴史を愛するその将校は、1945年当時のスターリン体制の命令を無視した。未来のヨハネ・パウロ二世カロル・ヴォイティワは、ローマ帝国滅亡に関する本の翻訳を手伝うことで気付かないうちに自らの命を救っていたのである。教皇の命についてのこの知られざる話は、イタリアの週刊誌「ファミリア・クリスティアーナ」で元将校バシリ・シロテンコ氏自身が明らかにした。

中世史教授シロテンコ氏は、1945年1月17日、ドイツ支配下のクラクフを占領したソ連軍の一人だった。その翌日、ソ連軍はクラクフから50kmのソルバイ工場石切り場を占領する。

シロテンコ氏は次のように語る。「ドイツ人は降伏し、すぐに撤退するところでした。ポーランド人労働者たちは、身を隠していましたが、私たちは到着すると『もう自由です。出てきてください。』と叫び、出てきた労働者の数を数えると80人でその中には18人の神学生がいました。」

しかしスターリンの解放軍はポーランド人を救う軍隊ではなかった。ソ連兵は、金銭、時計、洋服と

奪えるものは何でも奪っていった。クラクフに到着したロシア人には食糧もなかったのである。一方、シロテンコ氏はラテン語とドイツ語の本を探していたので、神学生に出会えたことは幸運だった。シロテンコ氏は当時のことをこう語る。「神学生の一人を呼んで、ラテン語とイタリア語から訳してくれないかと頼んでみました。」その神学生は、ラテン語やイタリア語は苦手ではほとんど勉強していないと答えるが、おどおどしながら、語学に堪能で優秀な友人がいるとすぐに付け加えた。それがカロル・ヴォイティワだったのである。「それからカロルを見つけるよう指令を出しました。カロルはロシア語を得意とすることがわかりましたが、母親がルッシンカという名前であることからわかるように、ヴォイティワ家はロシア・ウクライナにルーツがあったのです。それで、ロシア語からポーランド語への文書の翻訳も頼むことにしました。」

シロテンコ氏は神学生ヴォイティワと親しくなり、ローマ帝国滅亡についての論文の翻訳も頼んだが、それはスターリンによって翻訳が規制されているものだった。二人は親しい友人となったが、ある日、シロテンコ氏はソ連人民委員に呼び出しを受ける。「同志、あの神学生と一体何をしているのですか。スターリンの命令を無視する気ですか。1940年8月23日に出された、ポーランド国家公務員と教師や神学生に対する命令をご存じでしょう。」シロテンコ氏は次のように答えたという。「あの神学生を銃殺することなどできません。非常に役に立つ者ですし、語学やクラクフの町についてもよく知っています。」氏を呼び出したソ連人民委員は事情を知っていたが、スターリン体制に反抗するような危険をおかしたくはなかったのである。そのため、シロテンコ氏はすべての責任を負うことになる。

捕虜第一団がシベリアへ送られるときも、シロテンコ氏は同じ理由でソ連人民委員を説得し、シベリア行きのリストに上がっていた神学生たちの命を救った。シベリアに送られたその捕虜たちは、二度とポーランドに帰ってくることはなかったのである。シロテンコ氏はこう語る。「私はすぐに軍隊と連絡を取り、ヴォイティワと他の神学生も強制輸送からはずすようにと指令を出しました。」

カロル・ヴォイティワが1978年に教皇に選出されたとき、ソ連政府とKGB以外にロシア人で名前を挙げられた数少ないうちの一人がシロテンコ氏だった。3月6日、氏は教皇から85才の誕生日を祝うカードを受け取った。高齢の歴史学者であり赤軍の元将校でもあるシロテンコ氏は、カードを受け取ると次のように語った。「教皇も私も長生きしたものですね。」

(2001.5.3ローマ)